



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

「教師の専門性」意識の検討：
小学校・中学校・高校教師への質問紙調査から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2011-08-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 竹本,弥生, 高橋,智 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/108112

「教師の専門性」意識の検討

—— 小学校・中学校・高校教師への質問紙調査から ——

竹本 弥生*・高橋 智**

特別支援科学講座

(2010年9月27日受理)

1. 研究の目的と方法

教育現場の管理強化・成果主義の導入、マスコミの教師バッシング、地域・保護者からの過大要求、児童生徒の抱える問題の多様化・深刻化などによって、教師の仕事はますます困難になっている。現場で働く教師はそうした多様な問題や要求に応えようとしているが、今日の様々な教育問題に相即して付随・追加されていく膨大な「教師の専門性」に対して、小学校・中学校・高校の教師はいかなる「教師の専門性」意識のもとに日々仕事を進めているのであろうか。

本稿では、小学校・中学校・高校の教師がどのような「教師の専門性」意識をもっているのかを明らかにするために、「教師の専門性」意識（①教師の本来の仕事と考えていること、②教師として大切なこと、③教師として力を入れていること、④教師として時間を費やしたいこと、⑤教師として実際に時間を費やしていること）に関する質問紙調査票を作成し、神奈川県内の小学校・中学校・高校52校の教師1150人に対して質問紙を配布して調査を実施した。調査期間は2003年9月～10月、780件の回答があり回収率は67.8%であった（そのうち有効回答は765件）。

2. 調査の結果

2. 1 教師の本来の仕事と考えていること

「教師の本来の仕事と考えていること」に対して7項目から2項目を選択する形式で教師の仕事と校種との関連を検討した（表1）。校種にかかわらず「授業を工夫し子どもの学習意欲を育てる」を541名（70.7%）の教師が回答している。高校教師84名（36.1%）が「子どもに知識を伝える」と回答しているのに対し、小学校教師41名（13.9%）、中学校教師48名（20.3%）が回答している。また小学校教師132名（44.6%）が「人間関係づくりを育む」と回答しているのに対して、高校教師は57名（24.5%）が回答している。中学校教師105名（44.5%）が「子どもの心と身体の発達を促す」を回答している。

2. 2 教師として大切なこと

「教師として大切なこと」について8項目から2項目を選択する形式で、校種との関連を検討した（表2）。校種にかかわらず教師456名（59.7%）が「子どもがよくわかる教え方を工夫すること」を回答している。高校教師118名（50.6%）が「教員自らが学ぶ姿勢をもつこと」を回答しているのに対し、小学校教師は114名（38.5%）が回答している。また中学校教師93名（39.6%）が「子どもから信頼されること」を回答しているの

* 神奈川県立座間養護学校有馬分教室

** 東京学芸大学（184-8501 小金井市貫井北町4-1-1）

表1 「教師の本来の仕事と考えていること」の校種別割合

	小学校		中学校		高校		合計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
授業を工夫し子どもの学習意欲を育てる	212	71.6	165	69.9	164	70.4	541	70.7
子どもに知識を伝える	41	13.9	48	20.3	84	36.1	173	22.6
子どもの心と身体の発達を促す	115	38.9	105	44.5	86	36.9	306	40.0
子どもの立場にたつて常に考え子どもを理解する	42	14.2	13	5.5	25	10.7	80	10.5
人間関係づくりを育む	132	44.6	82	34.7	57	24.5	271	35.4
社会のルールを教える	46	15.5	57	24.2	50	21.5	153	20.0
組織の一員として保護者に対応する	3	1.0	1	0.4	0	0	4	0.5
合計	296	200.0	235	200.0	233	200.0	764	200.0

表2 「教師として大切なこと」の校種別割合

	小学校		中学校		高校		合計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
子どもがよくわかる教え方を工夫する	181	61.1	144	61.3	131	56.2	456	59.7
教員自らが学ぶ姿勢をもつ	114	38.5	94	40.0	118	50.6	326	42.7
子どもから信頼される	96	32.4	93	39.6	68	29.2	257	33.6
子ども立場にたつて考える	83	28.0	54	23.0	56	24.0	193	25.3
子どもに公平である	40	13.5	31	13.2	51	21.9	122	16.0
子どもの個性を伸ばす	53	17.9	26	11.1	26	11.2	105	13.7
自分自身の社会性を豊かにしていく	24	8.1	24	10.2	13	5.6	61	8.0
学校だけでなく地域活動や社会活動でも指導者になる	1	0.3	4	1.7	3	1.3	8	1.0
合計	296	200.0	235	200.0	233	200.0	764	200.0

に対して、高校教師は68名(29.2%)が回答している。

2.3 教師として力を入れていること

「教師として力を入れていること」を6項目から2項目を選択する形式で、校種との関連について検討した(表3)。校種にかかわらず教師589名(77.1%)が「教科教育」を回答している。小学校教師104名(35.1%)が「発達支援」を回答しているのに対し、中学校教師は57名(24.2%)、高校教師は56名(24.1%)が回答している。また中学校教師141名(59.7%)が「生徒理解」を回答しているのに対し、高校教師は110名(47.4%)が回答している。

表3 「教師として力を入れていること」の校種別割合

	小学校		中学校		高校		合計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
教科教育	231	78.0	166	70.3	194	82.8	589	77.1
生徒理解	155	52.4	141	59.7	110	47.4	406	53.1
発達支援	104	35.1	57	24.2	86	24.1	217	28.4
社会的ルールの伝達	101	34.1	62	26.3	25	17.7	204	26.7
部活動(クラブ活動)	1	0.3	30	12.7	57	15.9	68	8.9
進路指導	0	0.0	14	5.9	50	12.1	42	5.5
合計	296	200.0	236	200.0	50	200.0	764	200.0

2. 4 教師として時間を費やしたいこと

「教師として時間を費やしたいこと」を8項目から2項目を選択する形式で、校種との関連について検討した(表4)。校種にかかわらず教師705名(92.5%)が「教材研究・授業準備」に時間を費やしたいと回答している。高校教師109名(47.0%)が「研修」を回答しているのに対し、中学校教師は74名(31.5%)が回答している。「採点・成績評価」については小学校教師35名(11.9%)が回答しているのに対し、中学校教師は16名(6.8%)、高校教師は7名(3.0%)のみが回答している。

2. 5 教師として実際に時間を費やしていること

「教師として実際に時間を費やしていること」を8項目から2項目を選択する形式で、校種との関連について検討した(表5)。校種にかかわらず教師705名(53.9%)が「雑務」と回答している。高校教師140名(60.3%)が「職員・学年・校務分掌など各種の会議」を回答しているのに対し、中学校教師は88名(37.4%)である。小学校教師91名(31.0%)が「採点・成績評価」を回答しているのに対し、中学校教師は34名(14.5%)、高校教師は7名(3.0%)である。中学校教師87名(37.0%)が「生徒指導」を回答しているのに対し、高校教師は26名(11.2%)が回答している。

2. 6 教師の専門性尺度と校種との関連

項目分析した結果、40項目についての平均±標準偏差が得点範囲をこえるものを削除した。さらにIT関連分析の結果から20項目を因子分析の対象とした。また教師の専門性尺度の因子構造を確認するために、主成分分析を行った。固有値1.0以上のものが20個見いだされた。スクリープロットで後続因子の固有値の減衰状況を検討した結果、3因子解が適当と思われた。3因子構造において、内容的妥当性がみられ、寄与率が44.1%となったので、再度、因子分析(主成分分析, oblimin回転)をして表6に示す因子行列を得た。

表4 「教師として時間を費やしたいこと」の校種別割合

	小学校		中学校		高校		合計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
教材研究・授業準備	279	94.6	212	90.2	214	92.2	705	92.5
生徒指導	127	43.1	103	43.8	71	30.6	301	39.5
研修(校内校外を問わず)	102	34.6	74	31.5	109	47.0	285	37.4
部活指導	2	0.7	41	17.4	52	22.4	95	12.5
採点・成績評価	35	11.9	16	6.8	7	3.0	58	7.6
職員・学年・校務分掌等の各種の会議	17	5.8	10	4.3	4	1.7	31	4.1
授業計画書の作成	20	6.8	6	2.6	1	0.4	27	3.5
雑務	7	2.4	5	2.1	5	2.2	17	2.2
合計	390	200.0	470	200.0	464	200.0	1524	200.0

表5 「教師として実際に時間を費やしていること」の校種別割合

	小学校		中学校		高校		合計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
雑務	162	55.1	120	51.1	128	55.2	705	53.9
職員・学年・校務分掌などの各種の会議	169	57.5	88	37.4	140	60.3	301	52.2
教材研究・授業準備	77	26.2	77	32.8	113	48.7	285	35.1
生徒指導	45	15.3	87	37.0	26	11.2	95	20.8
採点・成績評価	91	31.0	34	14.5	7	3.0	58	17.3
部活指導	0	0.0	52	22.1	37	15.9	31	11.7
研修(校内校外を問わず)	32	10.9	7	3.0	10	4.3	27	6.4
授業計画書の作成	8	2.7	4	1.7	2	0.9	17	1.8
合計	294	200.0	235	200.0	232	200.0	762	200.0

因子Ⅰは、項目1, 2, 4, 8, 9, 12, 13, 14, 18の9項目で、因子の信頼係数 (α 係数) は、.846であった。この因子は「授業中にも一人一人の子どもの表情をみながら進める」「單元ごとに子どもが理解しているかどうかを確認する」「同僚と授業の進め方や教材についての意見交流を行う」など授業や教科に関する内容のものが多く含まれているため「教科指導」因子と命名した。

因子Ⅱは、項目28, 29, 30, 31, 32, 34の6項目で、因子の信頼係数 (α 係数) .815であった。この因子は「子どもの問題行動にはすぐに対応する」「子どもの問題行動に対し保護者に連絡し相談する」「子どもの友人関係には気をくばる」など、生徒指導への対応に関する内容が多く含まれているため、「生徒指導」因子と命名した。

因子Ⅲは、項目19, 20, 21, 22, 23の5項目で、因子の信頼係数 (α 係数) は、.830であった。この因子は「子どもの表情の変化に気をくばる」「子どもに廊下などで声かけを行う」「クラスでの話し合いを十分に行う」など学級経営に関する内容が多く含まれているため「学級経営」因子と命名した。

教師の専門性尺度と校種との関連をより明らかにするために、職種から管理職・養護教諭・その他の68名を除き、700名の教師を対象に、先にあげた因子について各尺度得点を求め検討を行った。対象者の各下位尺度得点を20パーセント以下のもを「やや軽視」群、20～40パーセントのもを「平均的」群、40～60パーセントのもを「重視」群、80パーセント以上のもを「最重視」群に分類した。

自由度調整済みの残差分析の結果、高校教師の教科指導「最重視」群 ($Adj = 9.2, P < .01$) が高い。結果を表7に示した。

中学校教師は「生徒指導」の「重視」群 ($Adj = 2.7, P < .01$)、「最重視」群 ($Adj = 4.4, P < .01$) が高く、高校教師は「生徒指導」の「やや軽視」群 ($Adj = 4.3, P < .01$) が高い (表8)。

表6 教師の専門性の因子分析 (主成分分析・oblimin回転)

項目		因子Ⅰ	因子Ⅱ	因子Ⅲ
教科指導 ($\alpha = .846$)				
K 9	子どもが自主的な体験をできるような機会を作る	.68980	.07352	.00129
K 2	單元ごとに子どもが理解しているかどうか確認する	.65348	-.04687	.11608
K14	学習に遅れがちな子どもに対して、個人指導を行う	.62905	.01101	-.05878
K13	授業進捗の状況を年間計画に照らしあわせ確認する	.59022	-.04374	-.00028
K12	同僚と授業の進め方や教材について意見交流を行う	.58851	-.17871	.02939
K 4	テスト等の誤答のやり直しが出来ているか確認する	.55859	-.06798	.04248
K 8	視覚的な教材を準備する	.55038	.01270	-.03404
K18	学習に遅れがちな子どもにあった教材を用意する	.54145	.02788	-.21353
K 1	授業中に一人一人の子どもの表情を見ながら進める	.49326	.03074	-.14313
生徒指導 ($\alpha = .815$)				
K30	子どもの問題行動にはすぐに対応する	-.02093	-.84121	.08242
K31	子どもの問題行動に対し保護者に連絡し相談する	.02847	-.72134	.06579
K29	遅刻や早退やエスケープなどの指導を行う	-.15027	-.59426	-.17710
K28	子どもの様子などについて教員間で意見交流を行う	.10202	-.51405	-.10075
K34	社会ルールを教える	.14678	-.46340	-.04518
K32	子どもの友人関係に気を配る	.20039	-.44466	-.12578
学級経営 ($\alpha = .830$)				
K21	子どもに個人面接や教育相談を行う	-.10275	-.05377	-.84289
K22	保護者に個人面接や教育相談を行う	.14651	-.06525	-.61828
K20	子どもに廊下などで声かけを行う	.18779	-.12003	-.50385
K23	クラスでの話し合いを十分に行う	.33123	-.11056	-.38164
K19	子どもの表情の変化に気を配る	.30997	-.13803	-.36710
因子間相関		1.000		
			-.506	1.000
		-.503	.533	1.000

中学校教師は「学級経営」の「最重視」群 (Adj = 3.7, P<.01) が高く, 高校教師は「やや軽視」群 (Adj = 5.9, P<.01) が高い (表 9)。

表 7 教科指導と校種との関連

人数	割合	やや軽視	平均的	やや重視	重視	最重視	合計
小学校		73	73	59	33	20	258
		28.3%	28.35%	22.95%	28.35%	7.85%	37.6%
		5.7**	2.6	1.5	-2.1	-7.3	
中学校		40	42	42	59	30	213
		18.8%	19.7%	19.7%	27.75%	14.1%	31.0%
		-1.6	1.4	-1	2.0	-1.6	
高校		18	26	36	40	96	216
		8.3%	12.0%	16.7%	18.5%	44.45%	31.4%
		-4.3	-4.6	-1.5	0.8	9.2**	
合計		131	141	137	132	146	687
		19.0%	20.5%	19.9%	19.25%	21.35%	100.0%

df = 8 p <.01

表 8 生徒指導と校種との関係

人数	割合	やや軽視	平均的	やや重視	重視	最重視	合計
小学校		52	48	59	56	39	254
		20.50%	18.90%	23.20%	22.00%	15.40%	36.90%
		0.5	0.5	1.4	-1	-1.3	
中学校		19	32	40	66	59	216
		8.80%	14.80%	18.50%	30.60%	27.30%	31.40%
		4.3	1	-0.5	2.7**	4.4**	
高校		63	44	42	44	25	218
		28.90%	20.20%	19.30%	20.20%	11.50%	31.70%
		4.3**	1	-0.5	-1.6	-3	
合計		134	124	141	166	123	688
		19.50%	18.00%	20.50%	24.10%	17.90%	100%

df = 8 p <.01

表 9 学級経営と校種との関係

人数	割合	やや軽視	平均的	やや重視	重視	最重視	合計
小学校		44	43	62	63	49	261
		16.90%	16.50%	23.80%	21.10%	18.80%	37.60%
		-1.7	-0.1	0.3	1.7	-0.3	
中学校		23	30	48	54	59	214
		10.70%	14.00%	22.40%	25.20%	27.60%	30.80%
		-4.1	-1.2	-0.3	1.9	3.7*	
高校		73	42	51	27	26	219
		33.30%	19.20%	23.30%	12.30%	11.90%	31.60%
		5.9	1.3	0	-3.7	-3.4	
合計		140	115	161	144	134	694
		20.20%	16.60%	23.20%	20.70%	19.30%	100%

2. 7 教師群と校種との関連

「教師として大切なこと」と「教師として力を入れていること」の回答を1-0型のカテゴリカル変数に変換し、回答者の個人得点を三つの次元(解)に分類し、第1次元解と第3次元解を採用し、回答者の個人得点の30%~70%を算出し、第1次元解と第3次元解の群の組み合わせで五つの群を作成した。

1群を「発達支援重視教師」、2群を「学級経営重視教師」、3群を「教科指導重視教師」、4群を「社会性重視教師」、5群を「生徒指導重視教師」と命名した。

1群の「発達支援重視教師」とは、子どもの個性を伸ばしながら心身の発達を促すことを重視する教師のことである。2群の「学級経営重視教師」とは、子どもの立場にたつて子どもと公平に関わりながら個性を伸ばす学級経営を重視する教師のことである。3群の「教科指導重視教師」とは、子どもを理解しながら教科指導を重視する教師のことである。4群の「社会性重視教師」とは、社会的ルールの伝達や進路指導を重視する教師のことである。5群の「個別支援重視教師」とは、個々の生徒を理解しながら個性を伸ばすことを重視する教師のことである。この5群の教師(管理職・養護教諭・その他を除く)と校種について検討した。

小学校においては1群(Adj=4.4, P<.01)で有意な正の相関が、4群(Adj=-1.6, P<.01)で有意な負の相関がみられた。中学校においては1群(Adj=-2.4, P<.05)で有意な負の相関がみられた。高校においては4群(Adj=3.3, P<.01)で有意な正の相関が、1群(Adj=-2.1, P<.05)で有意な負の相関が見られた(表10)。

2. 8 教職経験年数との関連

「教師の本来の仕事と考えていること」と教職経験年数との関連を検討した(表11)。教職10年未満の教師15名(12.4%)が「子どもに知識を伝える」を回答しているのに対し、教職20~30年の教師は82名(25.2%)が回答している。また10年未満の教師50名(41.3%)が「人間関係づくりを育む」と回答しているのに対し、教職20~30年の教師は116名(36%)が回答している。

「教師として力を入れていること」と教職経験年数について検討した(表12)。教職10~20年の教師141名(71.2%)が「教科教育」を回答しているのに対し、教職30~40年の教師は105名(85.4%)が回答している。教職30~40年の教師56名(45.5%)が「生徒理解」を回答しているのに対し、教職10年未満の教師は79名(65.3%)が回答している。

「教師として時間を費やしたいこと」と教職経験年数との関連について検討した(表13)。教職10年未満の教師106名(88.3%)が「教材研究・授業準備」と回答しているのに対し、20~30年未満の教師は306名(95.3%)が回答した。教職10年未満の教師30名(25.0%)が「研修」と回答しているのに対し、教職20~30年未満の教師は131名(40.8%)、教職30年~40年未満の教師は50名(40.7%)が回答した。

「教師として実際に時間を費やしていること」と教職経験年数との関連を検討した(表14)。教職10~20年の教師36名(18.2%)が「部活指導」を回答し、教職30~40年の教師は7名(5.7%)が回答した。

表10 教師の群と校種

人数 割合 残差	1群	2群	3群	4群	5群	合計
小学校	36 29.3% 4.4**	17 13.8% 1.7	28 22.8% -4	20 16.3% -3.1**	22 17.9% -1.6	123 35.2%
中学校	11 10.0% -2.4*	11 10.0% .0	32 29.1% 1.5	28 25.5% -2	28 25.5% .9	110 31.5%
高校	13 11.2% -2.1*	7 6.0% -1.8	24 20.7% -1.0	43 37.1% 3.3**	29 25.0% .7	116 33.2%
合計	60 17.2%	35 10.0%	84 24.1%	91 26.1%	79 22.6%	349 100.0%

*<.05 **<.01

表11 教師の仕事と教職経験年数との関連

	10年未満		10～20年		20～30年		30年～40年		合計	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
授業を工夫し子どもの学習意欲を育てる	80	66.1	137	69.2	231	71.7	93	75	541	70.7
子どもに知識を伝える	15	12.4	48	24.2	82	25.5	28	22.6	173	22.6
子どもの心と身体の発達を促す	56	46.3	79	39.2	121	37.6	50	40.3	306	40.0
子どもの立場にたって子どもを理解する	19	15.7	19	15.7	25	7.8	17	13.7	80	10.5
人間関係づくりを育む	50	41.3	65	32.8	116	36.0	40	32.3	271	35.4
社会のルールを教える	22	18.2	45	22.8	66	20.5	20	16.1	153	20.0
組織の一員として保護者に対応する	0	0	2	1	2	0.6	0	0	4	0.5
合計	121	15.8	198	25.9	322	42.1	124	16.2	765	100

表12 「教師として力を入れていること」と教職経験年数との関連

	10年未満		10～20年		20～30年		30年～40年		合計	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
教科教育	88	72.7	141	71.2	255	79.2	105	85.4	589	77.1
発達支援	29	24.0	50	25.3	93	28.9	45	36.6	217	28.4
生徒理解	79	65.3	110	55.6	161	50.0	56	45.5	406	53.1
社会的ルールの伝達	39	32.2	52	26.3	83	25.8	30	24.4	204	26.7
進路指導	1	0.8	13	6.6	21	6.5	7	5.7	42	5.5
部活動（クラブ活動）	6	5.0	30	15.2	29	9.0	3	2.4	68	8.9
合計	121	15.8	198	25.9	322	42.1	123	16.1	764	100

表13 「教師として時間を費やしたいこと」と教職経験年数との関連

	10年未満		10～20年		20～30年		30年～40年		合計	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
職員・学年・校務分掌など各種の会議	8	6.7	6	3.0	13	4.0	4	3.3	31	4.1
採点・成績評価	8	6.7	12	6.1	26	8.1	12	9.8	58	7.6
教材研究・授業準備	106	88.3	179	90.4	306	95.3	114	92.7	705	92.5
生徒指導	70	58.3	81	40.9	104	32.4	46	37.4	301	39.5
研修（校内校外を問わず）	30	25.0	74	37.4	131	40.8	50	40.7	285	37.4
授業計画書の作成	6	5.0	1	0.5	10	3.1	10	8.1	27	3.5
部活指導	10	8.3	40	20.2	37	11.5	8	6.5	95	12.5
雑務	1	0.8	2	1.0	12	3.7	2	1.6	17	2.2
合計	1	0.8	2	1.0	12	3.7	2	1.6	17	2.2

表14 「教師として実際に時間を費やしていること」と教職経験年数との関連

	10年未満		10～20年		20～30年		30年～40年		合計	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
職員・学年・校務分掌など各種の会議	52	43.3	110	55.6	166	51.9	69	56.1	392	52.2
採点・成績評価	24	20	24	12.1	63	19.7	21	17.1	132	17.3
教材研究・授業準備	45	37.5	66	33.3	107	33.4	49	39.8	267	35.1
生徒指導	27	22.5	46	23.2	62	19.4	23	18.7	158	20.8
研修（校内・校外を問わず）	14	11.7	6	3	19	5.9	10	8.1	49	6.4
授業計画書の作成	3	2.5	0	0	5	1.6	6	4.9	14	1.8
部活指導	12	10	36	18.2	34	10.6	7	5.7	89	11.7
雑務	61	50.8	106	53.5	183	57.2	60	48.8	410	53.9
合計	120	15.8	198	26	320	42	123	16.2	761	100

3. 考察

校種にかかわらず教師は「授業を工夫し子どもの学習意欲を育てる」「子どもがよくわかる教え方を工夫すること」「教科教育」つまり「学習指導」を「教師の専門性」の核と考えている。そして校種により核に付随する教師の専門性が異なると思われる。

小学校教師は「人間関係づくり」「個性伸長」「社会的ルールの伝達」など「発達支援」を教師の専門性と考えている。教師の5群においても「発達支援重視教師」が小学校教師に多いことが明らかになった。小学生は心身共に大きく成長する時期であり、その意味で発達支援や個性の伸長を重視する教師が多いのは当然のことと言えよう。

中学生は思春期であるがゆえに心身の発達のバランスが崩れ、多くの問題行動をおこしやすいので、中学校教師には様々な対応が求められると考える。教師の専門性尺度においても「生徒指導」を重視・最重視する教師が多かった。また集団の力や仲間意識により生徒指導をしようとして「学級経営」を重視・最重視する教員も中学校教師に多いと考えられる。中学校教師は「生徒理解」「生徒からの信頼」「社会ルールを教える」など「生徒指導」を教師の専門性と考えている。

高校教師は「進路指導」「子どもに知識を伝える」「教師自らが学ぶ姿勢をもつ」「研修」などを大切と考えている。高校教師は「教科指導」を重視・最重視し、「教材研究」「子どもに知識を伝えること」を重視している教師が多い。つまり高校教師は「教科指導」を教師の専門性と考えている。

教師の専門性と教職経験年数との関連については、教職10年未満の教師は「子どもの立場にたって子どもを理解する」「子どもがよくわかる教え方を工夫すること」「生徒指導」を、教職20～30年のベテラン教師は「子どもに知識を伝える」「教科教育」「教材研究・授業準備」を重視している。

今回の調査により、小学校・中学校・高校の校種ごとに「教師の専門性」意識が異なること、また校種をこえて「教師の専門性」意識に共通項があることも明らかになった。教師の専門性の中核をなすのが「学習指導」であり、そこに付随して小学校教師の専門性は「発達支援」、中学校教師の専門性は「生徒指導」、高校教師の専門性は「教科指導」となった。